

## 論文題目：障害児の教育活動の参加に与える要因の検討

-モンゴルの就学前教育現場における教員の意識と態度に着目して-

19MD0122

吉野直子

### 研究の目的と方法

筆者は 2016 年に青年海外協力隊に参加し、現地の NGO「ウランバートル親の会 (Association of Parents with Disabled Children)」で教育を十分に受けられない障害児を対象に教育活動を行ってきた。対象としてきた子どもの中には、障害を理由に幼稚園や学校に通えない子ども、通えたとしても教員の障害に対する理解の差からドロップアウトしてしまう子どもが多くおり、対象児の幼稚園訪問の際はクラスにいただけで、特別な配慮を受けず活動に参加できない子どもや参加の意思を子どもに確認せずに別の部屋へと移される子どもなどケースなどが確認された。2020 年より「障害児のための教育改善プロジェクト第 2 フェーズ」に従事し、モンゴルの全国の幼稚園における障害児に対する発達支援・教育サービス提供の基盤（制度、計画、人材等）整備やインクルーシブ教育の体制づくりの一環として幼稚園の教員向けの研修を実施してきた。2021 年にはインクルーシブな幼稚園づくりを目指すモンゴルの幼稚園現場での教育実践を視察し、研修を受けた教員のクラスで、以前はクラスに入りたがらない障害児が、視察時にはクラスの子と同じ空間で活動に参加している様子を視察した。このようなことから、障害児を取り巻く人々、特に教員や支援者がどのように障害児を捉えているかによって、障害児の教育機会や実質的な教育への参加に違いがあるのではないかと考えた。障害児の参加を分析するにあたり、教員のどのような意識や態度が障害児に影響を与えるのかを分析する必要がある。

本論文の研究対象国であるモンゴルは 2009 年に「障害者の権利に関する条約」への加入後、関連する国内法を整備し、障害児・者の社会参加の保障に取り組んできている。しかし、現実には障害があっても必要な発達支援を受けられないこと、幼稚園や学校の受け入れ態勢が整っていないことなどから、就園・就学ができない子どもや、教員の障害や障害児に対する理解や捉え方の差によって、幼稚園や学校に通い続けることが難しくなるケースも少なくない。

本論文は、障害児の就学前の教育活動への参加に対する教員の意識と態度の影響をモンゴルにおける公立幼稚園の修学是教育の分析を通じて明らかにすることを目的としている。

本論文は、文献調査、統計、政策文書等の資料調査、資料調査並びに聞き取り調査（半構造化インタビュー）からなる。まず、障害児の教育活動への参加に関する議論において先行研究より整理し、障害児に影響を与える要因として、制度や物理的環境、障害者・児に対する社会的価値観が影響していることを示した。さらに、これらの要因に加え、障害者を取り

巻く障壁要素として指摘されている、物理的な障壁、制度的な障壁、文化・情報面での障壁、意識上の障壁、以上 4 つの障壁要素の側面からモンゴルの障害児の教育活動への参加にどのような影響を与えているか分析した。物理的、制度的、文化・情動的要因である場合であっても、障害児を取り巻く人々の意識や態度によって障害児の就学や教育機会への可能性が拡大したり、阻害されたりすることが示唆された。このことから、本論の研究課題である教員の意識と態度に着目し、どのような要素が障害児の教育活動への参加に影響を与えるかを分析した。(1,366 字)

## 論文の構成

- 第 1 章 序論
  - 第 1 節 研究の背景
  - 第 2 節 研究の目的
  - 第 3 節 研究の方法
  - 第 4 節 研究の構成
- 第 2 章 本研究における分析枠組み
  - 第 1 節 「障害の社会モデル」
  - 第 2 節 インクルーシブ教育
  - 第 3 節 意識と態度
  - 第 4 節 本論における分析枠組み
  - 第 5 節 本研究における用語の定義
  - 第 6 節 研究課題への接近方法
- 第 3 章 障害児の教育活動への参加に関する議論
  - 第 1 節 障害児の参加を取り巻く状況と課題
  - 第 2 節 障害児の教育活動への参加に影響を与える影響
- 第 4 章 モンゴルにおける障害児を取り巻く環境
  - 第 1 節 調査地の概要
  - 第 2 節 モンゴルにおける障害児を取り巻く現状と課題
  - 第 3 節 モンゴルのインクルーシブ教育
  - 第 4 節 障害児の教育活動への参加に影響する要因
  - 第 5 節 小括
- 第 5 章 障害児の教育活動への参加に影響を与える要因分析
  - 第 1 節 調査地の現状
  - 第 2 節 調査幼稚園の選定と概要
  - 第 3 節 調査幼稚園における障害の捉え方
  - 第 4 節 調査結果

## 第5節 小括

## 第6章 考察：障害児の教育活動への参加に与える影響

### 第1節 教員の意識と態度が障害児の教育活動への参加に与える影響

#### 第2節 小括

## 第7章 結論と今後の課題

### 第1節 結論：障害児の教育活動への参加を促進する可能性と限界

#### 第2節 今後の課題

## 論文の概要

本論文は7つの章で構成されている。

第1章では研究の背景と目的、研究方法及び論文の構成について述べた。

第2章では、研究の枠組みである障害の社会モデルと参加の枠組みを示した。参加はインクルージョンから定義し、参加を捉える枠組みとすることを述べた。本論では、多様性を持つ子どもが同じ時間・空間に存在することを前提として、教育活動に主体的に参加していくことをインクルージョンの理念として捉えた。本論では教員を含む障害児を取り巻く人々が多様性を認め合い、尊重し合うという相互の関係の中で教育される事が求められていると理解した。本論では、教育におけるインクルージョンであるインクルーシブ教育を分析の枠組みとし、インクルーシブ教育を実質的な教育機会の保障として用いた。さらに、モンゴルの教員の意識と態度の分析を通じ、障害児の教育活動への参加の実態を捉えた。本論では、意識と態度を「障害児に対する捉え方」「障害児への理解」を教員の「障害児に対する認知・感情・行動的成分などの思考過程に基づく、観察可能な主体的な行動や行為」と捉え、定義した。「障害児に対する捉え方」や「障害児への理解」を教員の意識と態度を分析する視点として、教員の「多様な子どもを理解する知識（インクルーシブ教育に対する知識）」や「子どもの権利」に対する意識にもふれ、分析した。

第3章では、障害児の教育活動への参加の現状と課題を先行研究より整理し、障害児の参加へ影響を及ぼす要因について分析した。障害児の参加へ影響を与えるマクロレベルの要因として、「権利条約や教育制度」や「社会的価値観の要素」が影響していることが明らかになった。またミクロレベルの要因として家族や教師などを含む障害児を取り巻く人々の存在や、さらにそれらの人々の「子どもへの関わり」「知識」「子どもの権利に対する思いや考え」「意識と態度」「障害の捉え方」「権力」などの要因が示された。障害児の教育や活動への参加には制度や物理的要因、社会からの排除、保護者の教育への関心度、人々の障害の捉え方の要因が影響していることが示唆された。分析の結果、障害児の教育活動への参加をめぐる議論として、障害児をどのような存在として捉えるかによって障害児の教育活動への参加に影響を与える事が明らかになった。

第4章では、モンゴルにおける障害児を取り巻く環境を統計や政府の政策から把握し、障害児を取り巻く教育環境や就学前教育における現状と3つの障壁要素の側面からモンゴ

ルの障害児の教育活動への参加にどのような影響を与えているかについて文献調査より示した。制度的要因に関しては、障害児の教育は権利として主流の教育制度に組み込まれている事が社会的背景の要因としてある中で、教員の子どもの権利に対する認知やそれに対する意識や考えが障害児の教育活動に影響を与える事が示唆された。制度的要因に加え、教員の意識によって障害児の教育活動への参加に影響を与える事がわかった。物理的要因に関しては、園舎の構造や設備がバリアフリーでないという物理的要因により、車椅子を使用している障害児の行動が制限され、教育活動への参加にも影響する事が示唆された。一方で、階段や段差があり、バリアフリーでないという物理的要因があったが、教員によるリソースルームの設置を行う工夫によって、以前はクラス内に入りたがらず活動に参加していなかった障害児がクラスの中であそぶ事ができるようになった事例も示された。このことから物理的要因がある場合でも、施設内の使い方や教員の工夫や対応によって、障害児の教育活動への参加に影響している事が明らかになった。情報的要因では、教育現場における情報の不足が障害児の教育機会を阻害する事が示唆され、物理的、制度的、文化・情報的要因である場合であっても、障害児を取り巻く人々の意識や態度によって障害児の就学や教育機会への可能性が拡大したり、阻害されたりすることが示唆される事を述べた。

第5章では、幼稚園における事例から、教員のどのような意識と態度が障害児の教育活動への参加に影響しているかについてインタビュー調査を実施し、調査結果から分析した。インタビューを行った5名の語りから、教員の意識と態度に関する9の概念から「伝える時の意識と態度」「接する時の意識と態度」「子どもと関わり合いを仲介する意識と態度」「障害やインクルーシブ教育に対する知識と理解」「子どもの権利に対する意識と態度」「障害児に対する捉え方」「否定的な意識や態度」「子ども1人としての理解」「自立・自己決定」が導き出され、「意識している関わり方」「障害に対する知識と理解」「障害への捉え方」の3つのカテゴリーを生成し語りの内容と分析結果を述べた。

第6章では、第5章で行った分析結果をもとに考察として、障害児の教育活動への参加に与える影響と今後の課題を示した。第1に、障害児を褒めるという教員の対応から障害児に対する「肯定的受容」の意識や態度が明らかになり、その結果、障害児自身が他者に共感的・肯定的に評価されていると感じることで教育活動への参加が促進される結果が得られた。さらに、調査結果で示された教員の「他児との関わりを広げようとする意識や態度」は、インクルーシブ教育を実践していく上で重要な要素であるという結果が得られた。第2に、「障害に対する知識と理解」では障害やインクルーシブ教育に対する知識と理解や子どもの権利に対する意識と態度が障害児の教育活動へ影響するという結果が示された。第3に、「障害に対する捉え方」によって教員の対応に変化があり、障害児の教育活動への参加を抑制あるいは促進させることが明らかになった。

さらに、教員が障害の有無に関わらず障害児を「1人の子ども」と捉えることや障害児の「自発性や自己決定を尊重」することが障害児の教育活動への参加を促進させる要素であ

ることがわかった。調査の結果、教員の「子どもとの関わり方」「障害に対する知識と理解」「障害の捉え方」によって障害児の教育活動への参加状態が異なることが示された。

第7章では結論と今後の課題として、障害児の教育活動への参加を促進する可能性と今後の課題について述べた。本論における事例分析の結果、障害児の教育活動への参加には教員の意識と態度が直接的に影響することが明らかになった。教員の意識と態度に関する具体的な要素として、「子どもとの関わり方」「障害に対する知識と理解」「障害の捉え方」は、障害児の教育活動への参加を拡大する重要な要素であることが示された。本研究の課題としては現地調査で示された結果は少数の教員から導き出したものであり、一般化できる域には達していない事や、調査対象幼稚園と教員はインクルーシブな教育実践を目指そうとする幼稚園であり、調査した教員のほとんどはインクルーシブな教育実践に関する研修の受講者であるため、調査結果に偏りが出た可能性がある事などが挙げられる。

しかし本論文はモンゴルにおいてこれまでほとんど研究の蓄積がない教員の意識と態度に焦点を当てたものとして事例を提供したことに一定の学術的価値を見出す事ができると考える。また、本論文は教育活動を子どもにとって物質的な場、機会、関係性とし、そこにおける参加を重要なものとして捉え、活動への参加を促進する要因として意識と態度を重要な要素として取り上げているところに独自性がある。

さらに、障害という視点に加えて、子どもや発達、また教育的な関係性という広い視野から意識と態度の点を検討し、機会と場という双方の点における多様性を前提にしたインクルーシブな子どもの育ちの場の形成に向けての示唆を与えている。

(3,148 字)